保育者の「実践知」の検討
—0歳児担任保育者の視線に着目して—

Examination of "practical knowledge" of the childcare worker
—Focusing on the gaze of a 0-year-old class teacher—

星野 優芽
Yume Hoshino

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 博士後期課程

キーワード：実践知，実践的知識，実践的思考様式
Key words：Practical intelligence, Practical knowledge, Practical thinking style

１．研究目的

本研究はこれまで，保育者の「実践知」を明らかにすることを目的として取り組んできた．今年度はそのなかで，対象としている保育者が作成する記録やドキュメントの資料が，実際の保育についての語りとどのように関連しているのかを明らかにするという計画だった．

しかしながら，「実践知」研究として取り組んでいくなかで，これまでの保育学分野における「実践知」（とその類似概念「実践的知識」「実践的思考様式」を用いた）研究の成果と課題について整理してみると，保育学において「実践知」を明らかにする上での方法論上の問題点に気が付いた．そこで，その時点からは「実践知」の問題点を踏まえ，それを打開するための研究手法を模索しているところである．今年度はそのことについて特に重点的に検討を行ったため，本報告書では，そのことについて報告していく．

２．研究実施内容

（1）これまでの「実践知」研究の成果

ここでは，「実践知」研究を概観したことにより見えてきた 4 つの特徴について述べていく．

1 つ目は，保育学における「実践知」は，さまざまな保育の状況を対象として検討されているという点である．定型発達児の保育を対象とするものがほとんどの中で，障害児保育に着目するものも一部見られた．定型発達児の保育を対象とした「実践知」研究では，乳児保育（0～2 歳児）と幼児保育（3～5 歳児）それぞれあり，乳児保育では食事と遊びの場面，それぞれ検討されている．一方の幼児では，遊び場面の検討もされているが，片付け場面に着目した研究が他と比べて多くなっている．さらに，片付け場面に状況を設定したうえで対象園を拡張し，園環境を条件に「実践知」を比較したり，園の屋内外での比較，時期による比較，学年と園の特色を合わせた比較など，さまざまな条件が設定されている．このことは，保育者が状況や条件によってそれに則した専門性を発揮していることを示していると考える．

2 つ目は，「実践知」は経験を積み重ねるごとに高まっていくことを前提として，対象者の経験年数に着目して検討されているという点である．「実践知」研究の対象者に着目すると，熟達保育者を対象にするものと，新任保育者と熟達保育者を対象にして比較するものなど，その熟達度合いと組み合わせて語られることも多い．その結果，やはり熟達者と新任者では「実践知」の内容も異なってくる．その内容については，保育者が語る保育行為の意味や理由に違いが現れたり，視線推移に現れる．こうした研究は，保育における専門性発達と「実践知」が不可分の関係にあることを前提とするものとなる．

3 つ目は，保育者の「実践知」を明らかにするための方法として，語に着目する点である．幼稚園と小学校の教諭を対象に，両者で用いられる同一の用語に対し，どのようなイメージを持っているのかを検討したり，日本とドイツにおける語の使用を比較するなどして検討されている．こうした研究は，「実践知」は保育観によって規定される

と捉えるものであった．

4 つ目は，身体に着目するという点である．身体から「実践知」を明らかにする研究は非常に少なく，また視線のみに着目したものとなっている．こうした研究は，保育者が何を考えているか，どんな保育観を持っているかといったこととは関係なく，事実としてどのタイミングで何を見ていたのか，ということを忠実に抽出する作業となる．こうした身体に着目する「実践知」研究は，保育者が何を語るか，何を意味づけるかということよりも，実際に何をしているのか，という点を重視しているといえる．

こうした，「実践知」研究における成果からその特徴を見ていくと，3 つの問題点が見えてきた．以下では，その問題点について述べる．

(2)「実践知」研究における問題点

①「実践知」を指す用語

保育学における「実践知」について，英語のキーワードを確認すると「Practical knowledge」と記載されていることが多い．しかし，諸外国における「実践知」は「Practical intelligence」と記載されるものもしばしば見受けられる．「knowledge」は和訳すると知識や知っていることを指す単語であり，「intelligence」は知能，理解力，思考力，知性を指す単語である．「knowledge」と「intelligence」の違いは，物事を情報として持っているのが「knowledge」で，そうした情報を活用して物事を想像したり，想定したりするのが「intelligence」であると言えるだろう．とすると，例えばある場面について思考してもらい，そこから語ってもらった内容を「実践知」とする場合は「intelligence」となり，保育者がある行為を決定する際に，子どもの発達を踏まえて思考しているときの発達の情報は「knowledge」となる．では，実際の保育場面を対象に，保育者の行為を「実践知」として位置づける際には，その行為は何となるのだろうか．行為の仕方を知っているという言い回しをすれば「knowledge」となるのか，それともこれまでの経験を踏まえ，どのように行為すべきかを考え決定しているのではればそれは「intelligence」となるのかもしれない．こうした用語の問題についてはこれまでの「実践知」研究において触れられていないため，それについて検討する必要があるだろう．

②「実践知」概念の多様化

次に，「実践知」研究を概観する上で，当然その研究における「実践知」が示す概念も整理した．その際，①で述べたような「知識」という語を使うものもあれば，「知性」という語を使うもの，「保育観」と同義に位置づけるものもあった．つまり，「実践知」概念が統一されていないという問題である．「実践知」という字面から，「実践における知」であることは想定できるが，それが知識なのか，知性・知能なのか，保育観なのか，あるいは実践中の行為は知識なのか知性なのか等，より厳密に検討する必要があるだろう．

③「実践知」研究における方法論

これまで「実践知」は，その多くの研究において対象者の語りを扱うものとなっている．つまり，研究者の側で用意した架空の保育場面を提示したり，教員研修用ビデオを提示したり，対象となる保育者の日頃の保育場面を想起してもらうなど，ある場面を想定した上で，それについてどう考えるかを尋ね，語ってもらう方法である．この方法論は，保育者が考え語ったことを「実践知」として位置づける．裏を返せば，保育者が語らなかったことは「実践知」にはならないし，語れてしまえば「実践知」になってしまうのである．

しかし本来は，想定した保育場面における保育行為の意味や理由を語れることよりも，実際に直面した状況においてどのように行動できるかが，保育者には求められるのではないだろうか．①②で述べたように，そもそも「実践知」が何を指す概念であるかについて，より厳密に検討する必要はあるが，やはり「実践における知」であるならば，保育者が実際にどのように保育を行っているのか，という行為の面にも着目する必要があると考える．

3．まとめと今後の課題

以上を踏まえると，「実践知」研究はさまざま成果があるものの，その問題点もいくつかある．しかも，本来の「実践における知」がどこまで明らかにされているかという点では，保育者が語れない部分にも「実践における知」があることを踏まえれば，それを明らかにするためには保育者の語りだけでなく，実際に行っている保育行為を緻密に検討する必要がある．

そこで今後は，保育者の保育行為を緻密に分析するための方法論を模索し，保育者が語れないことも「実践知」の範疇におさめて検討していきたい．

4．この助成による発表論文等

学会発表

星野優芽，「0 歳児クラス担任保育者の「実践知」—保育者の行為と思考を手がかりに—」，日本乳幼児教育学会第 32 回大会，2022 年 12 月 3 日，4 日，オンライン開催

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成（DA2205）「保育者の「実践知」の検討—0 歳児担任保育者の視線に着目して—」を受けたものである．